

『中学社会科教育技術』一九五四年四月（小学館）

特集・現場からの悩みにこたえる

—新しい社会科教育を求めて—

問題意識を

いかにしてもたせるか



矢口 新

一

問題意識をもたせるにはどうするかという問題であるが、こういうことが問題になる根底に、問題を持たせないと学習がはじまらない、そこで学習の第一段階で導入と称して問題を持たせることを教師が指導する、その場合の問題をもたせる方をどうするか、こういう考え方がありはしないか。これがもしありとすれば、そういう枠の中でこの問題を考えているから、問題がむつかしくなるのだとさたらねばならない。導入で問題をもたせて、それから学習が進展、展開するといふこの形式が平板に考えられていること、これが馬鹿々々しい問題を生み出しているのである。問題をもたせるなどということは、学習の全体、すなわち一つの単元なら単元を学習して行く間に出来て行くことである。一つの社会の事実をみて問題を考えることが出来るのである。そういうことをしないで、導入の段階と称して言葉で生徒をチヨ

ロマカソウとしてもだめである。子供に問題をもたせようとしたら、社会現象をいろいろな角度から子供のわかる程度で材料として提供してやる。そうすればこれはおかしいぞ、これは一体どういうわけか、と問題をもつに至るのである。それは学習するということである。

それは、わかっているが、そのはじめに問題をもたせる必要があるのではないか、というであろう。そこに形式的な考え方があって、その考え方を捨てなくてはならぬ。

今日は生産のこれこれのことについて、皆で考えてみよう。ところで先生が一つみんなに聞くが、この土地の生産のこれこれについてはどう思うか、とききなり切りこんだらよいではないか。私はそれではないと言いたいのである。

このように考えてもらえらるためには、少し基本的なことを説明しなくてはならないだろう。第一に問題解決ということに対する形式主義的な考え方があつたということである。はじめに問題があり、学習の終りはその解決であるという単純な考え方があつたのである。数学の応用問題をとく程度の問題解決学習が考えられているのである。そういう問題解決学習という概念なら、社会の学習には全然あてはまらないのである。妙な社会の学習と妙な問題解決学習と二つの勝手な概念を結合させて、それで自縛自縛、苦しんでわからないと言っている。まず第一に社会の学習とは、どうしてなされねばならぬか、という根本的なところから出発しなければならぬのである。社会のことを学ぶというには、相手が社会であるから、決して数学の応用問題をとくようには行かないのである。われわれは、相手によって学び方をかえなくてはならぬ。

社会を学ぶには、社会の現象をとらえて、これを整理し、その社会においてどこに欠陥があり、どこに特色があるかを明らかにすること

っている。特に先生は、教育者である立場上、自分で例えば地域社会の種々の現象をとらえて、これを整理し、どこにどういう欠陥があり、特色があるかを知っているのである。そしてそれを知るためのいわゆる材料、統計だとか、現実の姿だとかもおさえているのである。生徒はそれに比してすべて貧困なのである。そういう状態で学習が発するるのである。

例えばこの地域の交通の状態はこれだよと思う、これではいけないと思うとか、生徒はいろいろそれなりの意見をもっているであろう。しかしどういいう意見にしても、それは甘いのである。先生の研究したようにはつきり種々の材料を分析して、この地域社会はかくかくの社会であるから、ここに交通上の欠陥があり、ここに特色ありと押えているわけではないのである。だからただそんな感じがするという程度である。それはその生徒の判断の基礎になった理由をきいて、どんな社会の事実を材料としておさえて言っているのかを、しらべればすぐわかるのである。

そこで先生は、そうだろうか、それではこういう事実があるが、これについてどう思うと材料を出してやるのである。そうすると生徒は自分の判断をくつがえす材料が出されるので、おやつと思つて、考えるのである。そしていろいろの材料をおさえて、あれこれと解釈をして、自分が単純に思っていたのは甘かった、なるほど社会というものとはこういうものか、交通の問題といつてもなかなかむづかしいものだ、などということがわかつて来るのである。

ここで大切なことは、言葉にごまかされないということである。生徒が、この地域社会の交通は未発達であるなどという、往々にしてこの生徒の言葉をきいて、先生は、この生徒にはよくわかっているななどと思うのである。生徒が交通を発達させねばならぬなどということ

を云えば、問題をもっているなどと錯覚を起す。いやその前に先生自身に錯覚を起こしているらしい。よく多くの学校で地域社会の課題をとらえたなどと言っているのをみると、何とかを何々しなければならぬという表現のものが書いてあって、その内容は何も無いのがある。そんなのは課題でも問題でもありはしない。ただ言葉にすぎない。そういう言葉ではなく、実際に社会がどうなっていて、どこに具合のわるいところがあるか、どこがよいところかといった構造的な把握をしていることなのである。

しかし本当の先生はそういう構造的な把握をしているはずであるから、そういう構造的な把握をさせるように、その構造的把握をするに必要な材料を生徒に提出してやり、またそれをどこでどうさがして来いとか、どこで何をみて来いとか指導して、その材料をならべてみて、なる程こうなっているかと解釈してゆくのである。そしてこのところが具合がわるいな、しかしこのところはなかなか発展しているななどと、現実を整理して構造的把握をするのである。

この場合に先生は生徒に社会現象をみる観点も示してやること出来る。例えば生徒は交通を発展させると言葉でいっても、その内容は単純にバスを今より沢山通すことだけに考えている生徒が多いのである、ところがこの地域社会は、これこれだから、それよりはトラックが走れるように道をよくすることだということが考えられるように指導するのである。そういうように生徒が考えるように、その地域社会はトラックで運ばねばならぬ貨物が多いという材料を示してやる。こういう材料をみても君たちは、ただバスが回数がふえればよいと考えているのかと聞いてやる。生徒ははてなと思ひ、そこで考えて、なるほど社会のあり方から、交通も考えて来なければならぬ、この社会はこういう社会で、そこにおける交通のあり方はこういうこ

とであったかとわかるのである。

こうして社会をみる見方が生徒にわかって来る。同時にしっかりと観点によってみた社会の具体的な姿もわかるのである。

もちろん人をみて法をとけと言うことがあるように、小学校と中学校、中学校でも一年と三年はちがうのであるから、先生がもっている構造的把握を、そっくり生徒にさせようと思ったら大間違いである。中学生に対しても先生のつかんでいることの半分か、三分の一か、五分の一位でよいであろう。もし先生がもっているすべてを中学校の生徒に出すというのであれば、その先生は中学生と同じ程度の先生であろうと思う。それでは先生の資格がないのである。そんな先生は実際にいるはずがないと思う。

さてこのように考えると、私をはじめに言った導入で言葉だけでチヨロマカソウとしていたりといった意味がわかっていただけだと思う。材料を与えなくては、問題をもつに至らないのである。そしてそれは何も導入と言わなくても、もう学習が展開しているのである。しかしその展開されている学習は、ある意味から言えば、すなわち次の学習の基礎となり、そこから次の問題が起つてくることから言えば導入なのである。すなわち導入とか展開というのは一つの学習に対して見方がちがっているだけである。前の学習の次に起つて来たというようにみれば展開なのであり、後の学習の準備、基礎になっているとみれば導入なのである。だからあの導入、展開、終末などという形式にはあまりこだわらぬがよろしい。それにこだわると先生の頭が空気の流通がわるくなつて、ちっ息してしまうのである。

さて以上問題意識をもたせるという通俗的な問題に対して、基本的な考え方を一通り説明したと思うが、最後に教師はどれだけ真実の意味で問題をもっているであろうか、すなわちどれだけ社会の現実の姿

を構造的にとらえているであろうか。ただ口で社会のここに欠陥ありなどといっているだけではいけないのである。そういうことが教師によってなされていけば、妙な問題はおこらないはずだと思うのである。社会の悪い点だけを口で言うのが問題をもつことだと思ったり、ただ散漫にいろいろな材料をあつめただけであつたりしては、生徒に問題を発見させることは出来ないのである。学習は無限に問題を発見してゆくのが本当の姿なのであって、問題を解決するなどというのは、そういう無限の系列の中の一コマを言っているにすぎない。社会の現実は無限に問題を提示しているではないか。そこに迫って行くのが学習である。それが人間の学習の姿であろう。

(国立教育研究所所員)